

前号では『銭湯図解』を手がけるイラストレーターであり、実際に銭湯で番頭も務める塩谷歩波氏を紹介した。本号では塩谷氏にインタビューした内容とともに“現代における銭湯という場の価値”を考察する。銭湯は利用者にとってどのような魅力を持ち、どのように使われている場所なのだろうか。これまで銭湯利用の中心を占めていた層だけでなく、若い世代の中で近年増えつつある銭湯の使われ方にも注目したい。

■みんながフラットになる、“街の中にある自分の居場所” 塩谷歩波氏インタビューより（実施日：2019.3.25）

— 銭湯は自分にとってどんな場所？

銭湯という場所では、みんな裸だから、その人の着ている服や、名前も身分も年収も何も関係なく、ただ裸のその人がいるだけのすごくフラットな場所だと思っています。

そういった場所で、知らないおばあちゃんとかと他愛のない話をする時間がすごく大事だと思っていて、フラットな場所だからこそ素でいられる、素直になれる場所です。街の中にある自分の居場所、自分らしくいられる場所のように感じています。

— 銭湯は世の中にどのような場所を提供している？

小杉湯は来入りの半分は銭湯にしては珍しく若い人たちで、その人達の多くは休日に来るからレジャー感覚で来る印象です。女性は二人組、男性だとグループが多く、悩み事を話したり、恋バナが聞こえてくることもあります。他には、エンジニアや、ウェブメディアの人が多い気がします。デジタルデトックス^{※1}になるというのが理由かもしれません。SNS等で感想や情報を共有している人の多くがこういった方たちです。一方で、毎日来ているおばちゃん達にとってはおしゃべりの場だったりします。「銭湯は様々な属性の人にそれぞれ意味を持つ場所」で、自分を救ってくれた場所だったり、友達と来る場所だったり、井戸端会議の場所だったり、療養の場所だったり。ごった煮のようなところで、求めているものが一人一人違うのもまた面白いところだと思います。

その中でも特に銭湯じゃないとできないと思うことは弱っている人にとっての居場所を提供することだと思っています。レジャー感覚はスーパー銭湯でも味わえますし、おしゃべりは銭湯でなくてもできます。私自身が弱っている時に銭湯という存在がすごくちょうどよくて、いろんな世代の人、いろんな属性の人がいる中でぼーっとできる

場所として重宝しました。働きすぎている人、追い込まれている人にはおすすめです。500円以内で行けるし、体調も良くなるし、時間も潰せるし、“サードプレイスとしてカフェに負けない魅力”を持っているかなと思っています。

— 今後の銭湯はどうなっていくと思うか？

若い世代の銭湯の利用が増えているとはいえ、まだまだ銭湯産業は厳しい状態にあります。メディアで銭湯ブームを取り上げられることも増えていますが、やはりレジャースポットの一つとしての紹介になりがちです。銭湯の古い感じを面白いと思って来る人もいますが、銭湯に非日常的な場としての役割を求める人たちには、普通の銭湯よりも、スーパー銭湯の方が人気があります。

銭湯が今後も続いていくためには、若い人たちも日常的に来てくれて、居場所と感じてくれることが必要かなと思います。一度だけではなく日常的に利用してほしいと願っています。

銭湯というのは「ケの日のハレ」で、ヘトヘトに疲れた一日の終わりにふらっと行って、お酒を飲んで帰って、寝て、次の日も頑張ろうと気持ちをリセットする場所。ちょっとしたご褒美なのです。今後、そういう使い方をしてくれる人が増えると嬉しいです。



番台ではタオルの貸出やアメニティの販売もおこなっており手ぶらで訪れても入浴できる

■改めてサードプレイスを考える

サードプレイスという言葉をよく耳にするようになったが、その言葉からはカフェのような場所をイメージする人が多いのではないかと。サードプレイスについて、アメリカの社会学者レイ・オルデンバーグ氏は著書『ザ・グレート・グッド・プレイス』（The Great Good Place, 1989）で以下のように述べている。

サードプレイスの定義と特徴（オルデンバーグ氏による）

定義 コミュニティにおいて、自宅や職場とは隔離された心地のよい第3の居場所

- 特徴**
- ・中立の領域に存在（個人が自由に集まる公共的な場所）
 - ・人々の差別をなくして社会的平等の状態にする
 - ・会話がおもな活動である
 - ・利用しやすさと便宜（就業時間外にも営業している）
 - ・サードプレイスの個性は、常連客によって決まる
 - ・あつて当たり前と思われていて、その大半は目立たない
 - ・遊び心に満ちた雰囲気の特徴とする
 - ・もう一つのわが家

オルデンバーグ氏の定義したサードプレイスは“自宅や職場以外の第3の居場所”という意味だけでなく、コミュニティが発生している場所を指している。この著書の中では、カフェが例の一つとして挙げられているが、ここで書かれているのは常連客によってフラットに交流が行われていた30年ほど前のカフェの情景であり、現代のチェーン展開のカフェで多く見られるような、一人でパソコンを開いてゆっくりしたり、友人と時間を過ごすために訪れるカフェとは場所の性質が異なる。

サードプレイスの特徴として挙げられている、常連客によるコミュニケーションが盛んに行われている場所という意味では、今日の日本においては、カフェよりもむしろ、銭湯の方があてはまるのではないかと。

本来銭湯は「入浴」のために訪れる場所であったが、風呂が各家庭に普及した現代社会において、自宅の風呂ではなくあえて銭湯に行くという行為は、日常の延長線上にありながら、ほんの少しの特別感を持つ。このちょっとした日常との距離がよい気分転換になり“心地のよい第3の

居場所”として機能するのだろう。

■銭湯の持つサードプレイス以上の魅力

情報技術の進歩により、人々はオフィスのデスクに居なくとも仕事ができるようになり、便利になった一方、どこに居ても常に仕事に追いかけるようになった。これは、仕事においてだけではなくスマートフォンを開けば山のような情報が目に飛び込んでくることや、SNSなどを通して常に誰かとつながっていることにも言え、デジタル社会に疲れてしまっている人も多い。銭湯はデジタルデトックス^{※1}にはもってこいの場所で、このような現代社会特有の疲れを癒やしてくれる場所と言えるだろう。

また、銭湯の注目すべき点は気持ちの疲れだけではなく、身体の疲れを癒やしてくれるところにもあるだろう。近年の健康志向の高まりの中で、ヨガ、フィットネスなど身体の調子を整える為のアクティビティに注目が集まるが、銭湯もまた、そうした目的を持つ人々に十分な効果を発揮するのではないかと。

銭湯は昔からある場所だが、あらためて現代社会の中での存在を考えるとサードプレイスとしてコミュニケーションの場でもあり、一人でゆっくり過ごすこともでき、さらには身体の調子も整えてくれる大変魅力的な場所であると言える。

現代人が熱心に“サードプレイス”を探し求めるようになったのは、かつては日常生活の中で自然に存在していた家や職場の外での“街の中の居場所”が失われつつあるからではないだろうか。こうした中でサードプレイス以上の魅力を持った銭湯の存在を見直すことは、人々にとって居心地の良い居場所を考えるうえでの大きなヒントになるだろう。

「行きつけ」と「居場所」

“momo channel”

「お気に入りの場所」と聞かれると、オシャレなカフェやお店を想像するが、今回紹介しているサードプレイスの特徴から考えると少し違う気がする。ペットの散歩中になぜかいつも座る、ぜんぜんオシャレじゃないベンチくらいの感覚だ。それは特に気分が上がるわけでもないで意識してこなかったが、自分の場所という感じはこちらの方が強い。雰囲気を良くすると、逆にこの感覚は失われてしまう気がする。このバランスこそがサードプレイスになりうるかどうかの難しさなのかも知れない。

※1 デジタルデトックス：スマートフォンやパソコン、インターネットから距離を置くこと、またそれらの過度な依存から脱する試みのこと